

難治性疾患克服研究の対象となっている 1 2 3 疾患について

主任研究者； 北島康雄

疾 患 名； 膿疱性乾癬

1. 初代研究班発足から現在までの間の研究成果について（特定疾患の研究班が独自に解明・開発し、本研究事業として公表したもの。なお、原則他の研究事業等に依存していないもの。）

（ 1 ）原因究明について（画期的又は著しく成果のあったもの）

	時期 及び 班長名（当時）	内容	備考
1	2007 北島康雄	乾癬感受性遺伝子解析により 16 領域に絞りこみ達成し、候補遺伝子のいくつかを同定（小澤）	
2	2004 北島康雄	マイクロサテライトマーカー・ゲノムワイドな乾癬感受性遺伝的相関解析により標的領域を約 40 に絞り込み達成（小澤）	
3	2002 小川秀興	膿疱性乾癬多発家系にアポトーシス関連分子である death receptor (DR3) の遺伝子変異を発見（武藤）	
4	1996 小川秀興	膿疱性乾癬、尋常性乾癬、日本人健常者間の HLA 比較（大河原）	

他の研究事業の成果と分かち難い場合は、備考欄に「合」と記載し理由を付記。

（ 2 ）発生機序の解明について（画期的又は著しく成果のあったもの）

	時期 及び 班長名（当時）	内容	備考
1	2007 北島康雄	膿疱性乾癬における表皮増殖と炎症反応の両面を橋渡しする S100A8/A9 分子の解析（許、岩月）	
2	2004 北島康雄	膿疱性乾癬病変形成における TARK、CTACK の関与（小宮根）および膿疱性乾癬ゲノムのエピジェネティック解析による発症機序解明（本間）	
3	1997 小川秀興	ケモカイントランスジェニックマウスを用いて膿疱性乾癬の病態を解析し、MCP1、gro- α の関与を示唆（中村）	
4	1992 今村貞夫	膿疱性乾癬膿疱化における角層内での IL8、C3a、C5a による多核白血球の集積（田上）	

他の研究事業の成果と分かち難い場合は、備考欄に「合」と記載し理由を付記。

(3) 治療法(予防法を含む)の開発について

ア 発症を予防し、効果があったもの

	時期 及び 班長名(当時)	内容	備考
1	2007 北島康雄	診断基準、重症度分類基準の策定と、個人調査票による臨床疫学調査への取り組み(岩月、黒沢)	
2	2000 小川秀興	汎発性膿疱性乾癬治療ガイドラインの作成(小澤)	
3	1997 小川秀興	pooled control を用いた膿疱性乾癬の症例対照研究・発症関連因子の検討(稲葉)	

他の研究事業の成果と分かち難い場合は、備考欄に「合」と記載し理由を付記。

イ 完治に至らしめることはできないが、進行を阻止し、効果があったもの

	時期 及び 班長名(当時)	内容	備考
1	2007 北島康雄	診療ガイドライン(初版)作成(岩月)による膿疱性乾癬治療の標準化	
2	1998 小川秀興	重症度判定スコアに基づいたエトレチナート療法のガイドライン(大河原)	
3	1995 橋本 功	E-PAP (evaluation for prognosis with averaged PASI) 法による乾癬治療評価(小澤)	

他の研究事業の成果と分かち難い場合は、備考欄に「合」と記載し理由を付記。

ウ その他根本治療の開発についてもの

	時期 及び 班長名(当時)	内容	備考
1	2004 北島康雄	マクロライドのケモカイン抑制作用による膿疱性乾癬の治療(小宮根)	
2			
3			

他の研究事業の成果と分かち難い場合は、備考欄に「合」と記載し理由を付記。

2. 「1」以外で、国内、国外を問わず、研究成果の現在の主な状況について

(1) 原因究明について(画期的又は著しく成果のあったもの)

	時期	内容	文献
1	1968	膿疱性乾癬 104 例の臨床および疫学的検討(発症要因として感染症、ステロイド内服、妊娠などの関係を示唆)	Baker H: Br J Dermatol 1968; 80: 771
2			
3			

(2) 発症機序の解明について(画期的又は著しく成果のあったもの)

	時期	内容	文献
1	1996	乾癬発症における溶連菌 M12 蛋白に対する抗体と HLA-A*0207 の関係	Muto M: Tissue Antigen 1996;48:645
2	1992	滴状乾癬発症における溶連菌感染の関与	Telfer NR: Arch Dermatol 1992; 128: 39
3			

(3) 治療法(予防法を含む)の開発について

ア 発症を予防し、効果があったもの

	時期	内容	文献
1	2005	中等症・重症乾癬に対する抗 TNF 抗体 Infliximab 導入および維持療法の第 相試験	Reich K ら; Lancet. 2005;366:1367-74.
2	2001	TNF に対するキメラ抗体 Infliximab による乾癬治療	Chaudhari U: Lancet 2001; 357:1842
3	2000	IL2 レセプター抑制剤 basiliximab の膿疱性乾癬に対する有用性	Salim A: Br J Dermatol 2000; 143: 1121

イ 完治に至らしめることはできないが、進行を阻止し、効果があったもの

	時期	内容	文献
1	2000	重症乾癬治療のシステマティック・レビュー	Griffith CEM ら： Health Technol. Assess 2000; 4: 1-125
2	2000	乾癬の PUVA 療法ガイドライン	吉川邦彦：日皮会誌 2000; 110: 807
3	1994	シクロスポリンによる乾癬治療ガイドライン	中川秀己:乾癬とシク ロスポリン, 国際医 学出版、東京、 1994,p121

ウ その他根本治療の開発についてもの

	時期	内容	文献
1		特になし	
2			
3			

3 .現時点において、次の事項について残された主要な課題及び今後の研究スケジュールについて

(1) 原因の解明について

	課 題	解決の可能性	今後の研究 スケジュール
1	原因遺伝子のゲノムワイド遺伝的相関解析 (小澤ら)	可能性あり。現 在 16 領域に絞 込み達成	平成 20 年度から 候補遺伝子解析 を進める
2	膿疱性乾癬における炎症制御遺伝子解析 (武藤、岩月、許ら)	可能性あり。	平成 20 年から炎 症制御・薬剤感 受性遺伝子解析 を順次実施
3			

(2) 発生機序の解明について

	課 題	解決の可能性	今後の研究スケジュール
1	S100A8/A9 分子による表皮細胞と炎症反応機序の解明：とくに関節症との関連（許、岩月）	発症機序のすべてではないが、可能性高い。	平成 20 年度から 3 年間の予定
2	膿疱性乾癬に特異度の高いバイオマーカーの同定と診断への応用（岩月、山西）	可能性あり	平成 20 年度から 3 年間の予定
3	膿疱性乾癬の炎症機序における樹状細胞の役割（小宮根）	可能性あり	平成 20 年から 3 年間

(3) 治療法（予防法を含む）の開発

	課 題	解決の可能性	今後の研究スケジュール
1	抗 TNF 製剤の膿疱性乾癬への評価：臨床治験論文の渉猟と評価	可能性高い	平成 20 年から 3 年間
2	膿疱性乾癬合併症としての関節症状治療の標準化	可能性高い	平成 20 年からリウマチ専門医との協同作業開始
3	小児・妊婦膿疱性乾癬の治療経過と長期予後	可能である	平成 20 年度から 3 年間の予定

4 . 重症化防止対策について

大多数の患者に対して外来通院によって症状のコントロールが可能な治療法（重症化防止のための治療法）の確立

	重症化防止のための治療法確立について解決すべき課題	5 年以内に解決できる可能性	解決不可能な場合の理由	左記理由を解決していくスケジュール
1	診療ガイドラインの完成：膿疱性乾癬治療の標準化	可能である		平成 20 年以内に完成し、公開予定

2	膿疱性乾癬個人調査票の評価と予後 QOL 解析により診断指針の作成	可能である すでに実行中		全国レベルの臨床統計と、結果の年次報告を行なう
3	前向き臨床症例登録・追跡調査（治療の評価、予後を追跡調査する）	可能である		平成 20 年度に登録 Websit を構築して、研究班集積症例を登録し、予後解析を実施
4	地域拠点形成による情報公開と患者支援（患者支援ネットワークの構築）	情報公開は全国展開可能。支援ネットワークは地域によって可能である		平成 20 年度から年次計画を立て。継続させる。